

## 21 ポーランドにおける日本認識 及びその文化研究へのアプローチ

W・コタンスキ（ワルシャワ大学名誉教授）

ポーランド人の日本認識は、16世紀の終わりに始まりましたが、それは耶蘇会（即ちイエズス会）の神父であるスカルガという人のお陰でした。彼の興味の対象は日本国におけるカトリック教の普及の問題であり、それに関して数頁の情報がありましたが、客観的な立場から書かれたものでもなく、それ以上の意義があるものではありません。その後、続々似たような内容の記事が発表されましたが、その当時ポーランドの国民は教会の意見に何の抵抗もなく従っていたので、日本に関する知識も余り発展を見せませんでした。

18世紀末から第一次世界大戦まで3大強国に分割され、亡国の運命にさらされていたポーランドは武装蜂起などの手段に訴えて独立、自由のために戦っていたので、日本などに関心を持つ余裕は殆どありませんでした。ですから、そのような状況下で為永春水の“いろは文庫”が部分的にでも外国語から翻訳されたことは例外に属します。そして、日露戦争が起こる前頃、急に日本への関心が高まって、本や論文などが現れ始めました。例えば、有名なBronislaw Pilsudskiのアイヌ文化に関する研究資料が印刷されたのもその頃です。ジャーナリストが日本に旅行したり、明治時代の“新体詩抄”などの日本文献が翻訳、発表されたりしました。それは他の殆どの国についてと同じように侍、芸者、腹切りなどに関する報告であって、他国の文明は全般的に研究すべきものであるという考えもアプローチももちろんなされませんでした。

1920年頃にやっと日本人がポーランドに渡来して、日本語を直接教えるという可能性が出てきました。その一人は横井某という商人でしたが、彼の商売については記すべきものは何もなかったとはいえ、日本語を2、3人のポーランド人に教えた結果、ポーランドにおける日本語のルーツの一つになったのです。それからもう60年以上経ちますが、とにかく商人がそのような文化的な活動の先駆者になったということは不思議な思いがします。

又、ポーランドにおける日本語教育のもう一つのルーツは梅田良忠というその当時の留学生でした。梅田氏は、横井氏とは無関係の人で、若いお坊さんとしてポーランド文化をワルシャワ大学で勉強する傍ら、ポーランドの学生に日本語を20年以上も教えてくれました。

私は横井氏の弟子の教え子であると同時に、梅田先生の下でも日本語を勉強しました。梅田先生は第二次世界大戦勃発と同時に帰朝され、関西学院大学でポーランド文化の講義をされました。ポーランドの地に先生が蒔かれた種子は無駄になる事なく、時が経つにつれて色々な実をもたらすことになりました。梅田先生の教え子の中には私以外に、例えばアメリカ合衆国のノートルダム大学で日本史の教授をしているB. B. Szczesniakという人や、ポー

ランドにおける日本関係の全文献目録の著者 K. Seyfried 氏がいました。梅田先生以外にも私達に大きな学問的影響を及ぼした先生方がいました。そのうち Jan Jaworski 教授、Witold Jablonski 教授は中国学科の教授でありながら、前者は日本語文法や極東の仏教の諸問題、後者は極東の歴史を講義されました。パリのソルボンヌ大学の卒業生であるこの2人の先生方の教え方に、フランス学問の雰囲気は私達ははっきりと感じたものでした。

さて、当時のワルシャワ大学の文献学部、即ち Philological Faculty では哲学的傾向が非常に強くて、倫理論・意味論・行動論・現実論・審美論・論理論などが広く教えられ、その知識を私達は自分の日本に関する問題に適応させましたし、先生達もそのような応用法を勧めていました。組織上は文献学部の中に東洋研究所があって、その中に中国学科がありました。中国に関する科目がほとんどで、中には日本文化に関する講義や演習などもありました。幸いに私の場合は、研究を指導する先生達が日本関係の科目を強化するために選んだ本などを個人的に読ませたり、特別に試験を行ったりして、日本研究のコースを修得出来るように便宜を図ってくれました。

以上のような研究の一部はナチスの占領下で秘密に行われ、卒業証書も戦争直後に渡されたという状態でした。戦後数年かけて日本語翻訳の諸問題という題で博士論文を書きましたが、諸般の事情により印刷した形で発表することが出来ませんでした。このようにして日本学の専門家になるや否や、中国学科の Jablonski 先生と日本研究のカリキュラムを作成して高等教育省に提出し、1953年になって日本語を中心にした日本文化の独立プログラムが中国学科のプログラムと一緒に正式に承認されました。初期のプログラムは後に何度も変更され現在の形になりました。日本学の全課程は5年間ですが、入学試験は1年おきに行われ、大体80人くらいの志願者のうち15—20人の新入生が入学します。各学年1週30—40時間のプログラムを持ち、会話・文法・書き方・翻訳の練習を始め、日本の地理・歴史・文学などの科目があり試験もかなり厳しいです。2年生になると学生は自分の興味に従ってセミナーを選びます。3人の教授が各自、専門分野のセミナーを持っています。Kotanski 教授は言語学と上代文化の分野、Tubielewicz 教授は歴史の分野、Melanowicz 教授は文学の分野を担当しています。卒業論文のテーマは3年生のセミナーで決められます。大学院制度はないけれど、卒業生は専攻分野に従ってチューターを決めてもらい、独自のプランによって博士号を得るための研究を続けることが出来ます。博士号取得候補者は余り多くありません。何故かと言うと、学者の任務はつらく給料はそれに比べて余り高くないからだと思います。卒業生は成績さえ良ければ毎年2、3人、時には5、6人が日本の文部省、国際交流基金あるいは大学の奨学金を得て、日本に2年ぐらい留学します。現在も10人以上の卒業生が日本の大学で研究を続けています。今まではポーランドに帰っても就職の問題がありましたが、今年からワルシャワ大学以外にもクラクフ大学とポズナニ大学に新しく日本語学科が作られたので、日本学専門の教師として就職出来る可能性も大いに出てきました。

教育の問題はこれくらいにして、日本認識の問題に戻ります。日本を訪れたことのあるジャーナリストや実業家達が、印象や見聞などをもとに記事を書いたり本を出したりしていましたが、大学で日本研究が始まった頃からそのような本がだんだん少なくなり、それ以後出

版社は日本研究者に日本に関する本を書かせようとしています。しかし残念ながらそれに応えられる専門家の数が少ないのが現状です。また、出版社を満足させるようなテーマを選択することも容易ではなく、たとえそのようなテーマがあってもそれを一定時間内に実現することも非常に難しいのです。とにかく出版社は高い水準に達した本を出すことを待望しています。

例として今までに出た日本に関する本のタイトルを若干挙げてみます。ワルシャワ大学の非常勤講師 A. Zulawska-Umeda は1983年に『俳句』を、1984年に『日本の古典詩歌』を発表しました。Dr. K. Okazaki は1986年に『現代短編小説選集』を発表しました。Prof. J. Tubielewicz は、1977年と1980年に『日本の神話』を、1980年に、『平安時代の迷信・魔法・占いの習慣』、1983年に『奈良と京都の印象記』、1984年に『日本歴史』を出版しました。M. Melanowicz 教授は、1978年に『谷崎潤一郎と日本の伝統』、1984年に『現代日本における人間と社会の諸問題』を出版しました。そのほかに翻訳も多数出版しました。例えば、芥川龍之介の『河童』、安部公房の『砂の女』、谷崎潤一郎の『蘆刈』『春琴抄』『蓼喰ふ虫』『瘋癲老人日記』『夢の浮橋』、井伏鱒二の『黒い雨』、夏目漱石の『こころ』『吾輩は猫である』、川端康成の『千羽鶴』『眠れる美女』、大江健三郎『万延元年のフットボール』、遠藤周作『侍』、木下順二『夕鶴』などたくさんの翻訳を出しました。最後に私も、1960年に『アジアの果てからの金言』、1961年に『万の葉・即ち日本古典文学選集』、1963年に『日本宗教史概説』、1973年に『日本美術概論』、1974年に上田秋成『雨月物語』、『日本語の書き方入門』（2冊）、1983年に『日本の神々の物語』、1986年に『古事記・即ち古事文（ふることぶみ）』などを発表しました。これらの本の発行部数は平均2万部ですが、時には4、5万部にも達することがあります。出版された本は、いずれもすぐに売り切れてしまうといった現状です。書物以外にも色々な論文・評論・記事などが数えられないほど多く雑誌などに掲載されますが、これは私達のささやかな研究の結晶です。書籍の発行部数や論文評論の発表頻度は日本文化啓蒙を測る関数であるし、著者たちの学問的水準と無関係ではないと思います。

さて日本学科の教授陣ですが、3人の教授以外に、3人の講師が博士号を持っており、5人が修士号を持っています。教師はそれぞれ研究分野を持っていますが、仏教伝来以前の日本文明、大陸から影響を受けた日本文明、西洋から影響を受けた日本文明の3つは、3人の教授の指導下に日本学の3大分野をなしています。この分け方はまだはっきりと機能していませんが、徐々に明確な形をとって行くことでしょう。

西洋から影響を受けた文明文化という分野は Melanowicz 氏の領域で、6人以上の若い学者が彼と協力、研究を行っています。もちろん文学の問題がその中心になっていますが、文学作品は日本人の生活を映す鏡のように見なされ、明治時代以来の文明文化を映す絵と見なすことが出来ます。方法論の面から見ると、Melanowicz 氏のアプローチは一般的に言えば、作家の想像力を考慮するので、主として仮想や推察による投影的現実を追求する研究家であると思います。だから感想即ち作家の所感などは二義的なもので、理性によって得られたあるべき筋道や観念化された世界観などを使って、あの投影的現実を副次的に比較したり

評価したりしています。

大陸から影響を受けた文明文化という分野は Tubielewicz 氏の領域ですが、2、3人の講師が協力して仏教や帰化人の問題に始まって江戸時代の終わりまでの領域をカバーしています。普通、弥生式文化もそこに含まれますが、歴史問題と共に当時の文明文化の諸問題が並行的に扱われています。方法論上、Tubielewicz 氏はまず歴史家として具体的な資料や証拠を探す傾向を強く持ち、そのうえで自分自身の感想や印象による受影的現実を知るように努力します。だから、毎年日本に行って岡山市付近で日本人の考古学者と共に発掘を行っています。実際に知識として根拠のない物事を心の中に思い浮かべることもあります。実在しないと思うものは切り捨てます。合理的なイデーの下で評価などを述べることもありますが、それはどの程度の客観的立場で、根拠のある立場であるかは問題として残されています。とにかく、一般観念を利用して普遍妥当性のある主張を通すこともあります。Tubielewicz 氏の観点は主として客観性を重んじて、それに自分の想像力を加えねばならぬというもののようです。

仏教以前の文明文化という分野も又出発点がないように見えますが、一般的に言えば縄文式文化を含め、仏教や漢字の伝播時代までということになります。その分野を研究しているのは、現在私だけです。日本に今留学している卒業生の一人が、関連した中世の問題を専門的に研究しているので、私の協力者になる可能性があります。私の先生 Jablonski 先生は、精神的には道家であって「私に従うな」と何度も繰り返していたものです。それは「自分の道を選べ」という積極的な姿勢を説いたものです。同様に Jablonski 氏の次の金言「隙間がないなら入るな」という教訓は「どの仮説にも隙間が有り得るので、それらの隙間を補ってより良い仮説を得ることが出来る」という積極的態度を示したものです。その教えに従って、私は新しい意見に出会っても自分の意見を持つよう今も努力しています。その意見に弱点があるということではなく、最初にその意見を正確に調べて、それは人の期待、希望を代表するもののだとしたら、次にその意見はどんな結果をもたらしたかを吟味するのです。そしてその結果が文化システムの中にどのようにして当て嵌められるかという手順で調べるのです。更にある意見そのものを研究の直接対象にするのではなく、その影響も考慮する必要があります。このように私の立場は文明を全体として研究すべきであるということになります。その文明全体の中のファクターを1つ取り出して研究したとしても、それは本当を言えば全体の出来事の流れの一部分なので、その流れの全体像を見せなければ信用出来ないということになります。

私の興味の対象は『古事記』などが中心になりますが、その内容は、中国文化からある程度離れているから研究の資料として十分な価値を保っています。『古事記』のような作品を文学書として見ると、その内容はただ想像によって描いただけと言えるかも知れませんが、神話学者はそれが空想物語であることを認めず、古代人の世界観の基礎を整えるもので、人のあらゆる行動・風俗や儀式などを動機付けるものということになっています。つまり神話は古代社会の結び付きの重要な成分で、神話の総体は、一民族の全宇宙の範囲や同民族の認識力の証拠であるとも考えられます。それが故に神話の研究家は実は上代文化全体を把握し

なければなりません。古事記に限らずどの文章をとっても、それは全民族の活動や考え方と結びついているので、正しく解釈するには、前もってその生活に関する知識を、たとえ不完全であっても、仮定してみるべきです。しかし、そのことは決して感想による知識の状態にはなりません。もちろんまた、空想に陥らないように注意をせねばなりません。種々の方法でやり直す努力をすれば良いのであって、そうすることによりだんだん肝心要の上代文化の粗筋が見えてきます。それは抽象思索による総合体のような合影の現実と言っても良いイメージを生じる結果、後に続くほかの学者の道しるべになる訳で、ひいてはその研究を大いに促進する結果をもたらすのです。私の方法論の基礎として、総合的なイメージというものがぜひ必要ですが、感想や想像の要素はあまり必要ではありません。

言うまでもないことですが、3分野の担当者は、お互いに討論などを通して交流し、2つか3つの分野が協力しあって共同研究をする例もあります。時には中国や朝鮮の研究者も協力します。ですから、このような分野の分け方は、伝統的な文学・歴史・言語学のような分け方より遥かに合理的であると思います。何故ならば、このように総体的な諸条件をはっきり認識することは、狭義の一分野を年代順に理解するより、文明文化のシステムを把握するのにはずっと適当であるからです。